

弟は……」と想いを走らせる時が一番苦しかったでしょう。

昭和十七年十二月二十五日、満期除隊で二年八カ月の勤務も無事終了し「現役満期徐隊」で舞鶴港に凱旋し一目散に自宅へ帰りました。

以後、大牟田市の三井金属アルミ工場に勤務し熟練工員として働き、第二の召集免除でした。終戦後は農地委員を拝命し、農地開放業務を行いました。また県特産の「八女茶」の品質改善・茶業振興等に努力しました。

北方警備の戦車隊

福岡県 三小田 隆 憲

私は、大正十一（一九二二）年二月十四日、三小田家の長男として生まれましたが、父は私が四歳の時に死亡しましたので、母一人子一人となりました。母の実家が嫁いだ家から直ぐ近くだったので、祖父母、そして母の兄である叔父さん叔母さん夫婦には子供がいなかった。「一緒に住まないか」と言われて同居することとなり、一家六人家族となった訳です。

子供は私一人でしたので、皆から可愛いがられて養育され、町立大江小学校に入学、小学校を卒業すると旧制中学校伝習館に入学しました。その後さらに三池工業二部採工部に入学し、二年間の実習を経て昭和十六（一九四一）年三月に卒業しました。

そして日本製鉄の大治工業所に就職することに

なつた訳ですが当時、戦局も悪化した時代でしたので、この就職先は中華民国の湖北省大冶石灰窯という所に在ると言うので、家族一同からは大反対の声でした。兵隊さんとして行くならいたし方ないが、何も戦地にある会社に入ることもないのではと言われたのでした。

祖父母、叔父、叔母さん、そして母の気持ちには分からないわけではないが、男として一端決心した以上はと納得してもらって入社することとしました。

昭和十六年四月、故郷を後にして入社しました。現地の会社は鉄鉱石を採掘して、これを粉砕、鉄を製造する工業所で、従業員は日本人五十人位、そして中国人の従業員六百人位でした。私たちの仕事は、主として現場で働く中国人の指示監督が業務でした。

採取した鉄鉱石を工場にて鉄に製錬して武器、弾薬その他の用途に用いていたようでした。このため敵の来襲も度々あったのですが、軍が警備を

していましたので、私達の仕事には支障はきたしませんでした。

昭和十七年七月、徴兵検査の通知がきて、現地で受けることになり、甲種合格となりました。いよいよ今度は軍人として国家に奉公する身となった喜びを実家にも報告をし、約二年間勤めた工業所を退職し、会社の同僚たちに別れを告げ、十二月八日出発、上海まで列車で来て内地行の船便を待ちました。船は貨物船で門司港着、約二年振り

で懐かしい故郷へ到着しました。

玄関に入ると祖父母、叔父、叔母さん、そして母は涙を流して喜んで迎えてくれました。いよいよ入隊の日も近くなったので、氏神様に武運長久を御願に行くと同級生の原木君も来ていました。彼は歩兵で朝鮮へ行くとの話でした。私は「戦車隊だから大陸だ」など互いに武運長久を誓い合い別れました。

昭和十八年一月二十日、近所の方など大勢の見送りを受け、福岡市須崎浦の第四国民学校に集合、

翌二十一日に福岡を出発、門司港より乗船して釜山に上陸、馬糞のこびり付いた貨車に乗り、一月二十八日に鮮満国境を通過しました。列車はさらに一路北上し、満州国の牡丹江を通りチャムスヘさらに北上して勃利に到着しました。列車から降りたら北満の寒さは身を切る寒さでした。そして三江省勃利に在隊の機甲第二師団戦車第二搜索隊第二中隊指揮班に入隊しました。

翌日から初年兵教育が開始されました。班員の古参兵にはノモンハンの強兵達もいたので内務班の「しごき」も厳しいものでした。毎日のビントは軍隊精神の鍛錬とかで、どこの部隊でも常道とされてきました。三カ月間は一般基礎教育を受け、さらに戦車隊としての特殊訓練となりました。毎日が無我夢中で訓練に内務班にと汗と涙と泥の中の毎日でした。

そして約三カ月の戦車隊の特殊訓練も終了、六カ月間の一期検閲も終わった時、旧制中学伝習館を卒業しているので幹部候補生を受けるよう言わ

ばかりです。夏は鉄板が焼けるように熱く、また冬は素手で触るとピタツと吸い付かれますので手袋は離せませんでした。

戦車隊は四両で一個小隊を編成、三小隊十二両で一個中隊なのです。それに段列といって補給隊がトラックで随伴します。この補給隊は食糧、弾薬、炊事、修理、衛生等を担当します。そして歩兵との共同作戦が主眼です。広漠たる広野も九月末日になると銀世界となります。

昭和十九年一月二十日、上等兵となり、私共は南方行きで、二月十六日勃利を出発し、十八日には鮮満国境を通過して、戦車第十一連隊第五中隊に転属となり、南方行の準備態勢を整え、その日を待っていました。しかし命令変更となり北方警備となりました。そして五月十六日小樽港を出発し、ウルツプ島に上陸、防衛に当りました。

近海には敵潜水艦が出没するというので緊張の日々でしたが、島への艦砲射撃はありませんでした。しかし同島の北方のマツワ島は米軍の艦砲射

れましたが、私は母一人子一人の境遇なのでお断りをしました。

部隊には九七式中戦車が配備されており、重量は十六トン、五七ミリ砲、七・七ミリ重機二丁、時速四十キロ、乗員は車長、砲手、操縦手、通信手の四人で携帯武器は拳銃です。仮想相手の敵国はソ連ですが、ソ連のBT戦車と比較すると、速度は六十キロ対四十キロ、砲の射程は一キロ対六百メートル、また砲の貫通力も劣ると共に装甲の厚さの差が致命的でした。ソ連戦車はキヤタピラが外れても車輪で走れるそうです。我が軍の九七式戦車はキヤタピラが切れたら動けません。湿地帯などで腹が擦ったら駄目でした。戦車隊は外目には花形のようなのですが実際は大変な苦勞でした。

訓練後の手入れは四人で行い、エンジンの給油から手入れ、砲と機関銃の分解掃除、キヤタピラの掃除、点検、修理等やることは山ほどあります。翌日の訓練に備えて冬季の暖気運転等は夜通しの作業になり、夏季は車内の熱気に目がくらむ

撃を受けて被害が出たという情報が入っていました。

戦況は日に日に悪化し、南方戦線の各守備島は次々と米軍の攻撃で玉砕になったというのでした。我々も本土防衛が任務となり、六月十日各隊より強健な者二十七人を選抜、戦車三台を持ってウルツプ島を出発、北海道帯広の高射砲隊援護のために網走港に上陸しました。帯広高射砲隊が編成され、北海道の防衛任務に就いたのです。

北海道も大都市は空襲でかなりやられたようでした。我々は第一線の敵との遭遇もなく、八月十五日の終戦を迎えたのでした。武装解除と言っても私達二十七人には戦車三両と騎兵銃十丁と拳銃十五丁のみです。

これらをまとめて返納し、九月二日、独立戦車第五中隊は解散となり、我々二十七人はそれぞれ郷里に向かって帯広を出発、函館、青森から東北線で九月十七日、懐かしい我家へと無事帰ることが出来ました。ウルツプ島に残留した約二万人

の方々はソ連軍が連行してシベリアへ抑留の身となったのです。

私達二十七人だけが帰れたということは、残った兵たちに対して申し訳ない感じがしましたが、当時の軍の命令、軍隊というところは正に運隊だったと考えさせられました。無事に帰った姿を見た家族は、前回、中国の会社から帰った時とはちがった格別な喜びようでした。

私の郷里は九州の田舎町だったので空襲もなく、家は無事でしたが、敗戦後の日本には食べ物から日用品まですべて配給制で苦労したのです。私は一年間位は自家の農業に従事していましたが、また勤めようと考え、八幡製鉄会社に行ったら空襲で工場がやられ就職するにも席が無いと言われました。そして大牟田市の建設会社永山工務店に就職することとなり、ここには六年間ほど勤めました。

しかし通勤の都合で同工務店をやめ、地元の柿原組に転職し、九州各地の土木工事に従事しまし

た。

また地元の国指定無形文化財の「幸若舞」の家元として文化発展に精進して来ました。七十六歳の時に脑梗塞を病い、身体不自由な身となり現在に至っております。